

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

eed

No. **48**

February, 2017

関西大学ニュースレター
発行日：2017年(平成29年)2月27日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>

伝統を、超える未来を。

130
KANSAI
UNIVERSITY

■対談 永尾 俊一 白ハト食品工業株式会社代表取締役社長 / 池内 啓三 理事長

事業を創造する

心躍らせて、挑戦の一步を踏み出そう

■リーダーズ・ナウ ー5

在学生ーシステム理工学部 4年次生 藤原 俊樹 さん
卒業生ー株式会社グリーティングワークス 代表取締役
徳丸 博之 さん

■研究最前線

グローバル・ロジスティクスの研究
グローバル化時代におけるロジスティクス ー7
商学部ー 飴野 仁子 教授
損傷した鋼橋の簡易補修の研究
叩いて亀裂閉口、当て板接着補修
簡易・安価に疲労寿命向上 ー9
環境都市工学部ー 石川 敏之 准教授

■トピックス [学内情報] ー11

文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に選定
「人に届く」関大メディカルポリマーによる未来医療の創出

■社会貢献・連携事業 ー13

関西大学×NTT西日本による産学連携プロジェクト
学生の就職活動を「ICT面接トレーニング」でサポート ほか

■関大ニュース ー15

宮原知子さんが全日本3連覇の快挙！ ほか

TOSHIKAZU NAGAO

■対談

心躍らせて、挑戦の一步を踏み出そう
事業を創造する

●地域と産業を元気にする人材をいかに育てるか

永尾 俊一

●白ハト食品工業株式会社
代表取締役社長

池内 啓三

●理事長

グローバル化や少子高齢化など社会情勢が大きく変化する現在、地域とともに日本が、これからも活力を維持し発展していくためには、新たな事業の創造が求められている。そのため知の拠点であり、次世代を担う人材を育成する場である大学に対する社会の期待は大きい。今回は「くくるブランド」を本学在学中に創業し、「おいもさんのお店らぼっほ」を立ち上げるなど、斬新な発想で成長し続ける白ハト食品工業の社長を務める永尾俊一氏と池内啓三理事長が、新たな事業への挑戦や失敗を恐れない人材の育成について語り合った。

◆“世界にTAKO-YAKI”夢を掲げて、学生時代に開業

池内 永尾さんが商売を始めたのは、まだ本学に在学中のことでしたね。

永尾 当社は1947年にアイスクリームメーカーとして祖父が創業しました。冬の閑散期にスイートポテトの製造販売を始め、私が千里山キャンパスに通っていたころは、大阪に4、5店舗を展開し、白ハト印の明石焼き、たこ焼き、スイートポテトを売っていました。私も時々手伝いをしていましたが、学生時代は家業を継ぐ気などさらさらなく、マスコミ業界を目指していました。

ところが、受けた会社はことごとく縁がなく、就職活動は完全な失敗。4年次生の秋になっても就職先が決まっておらず、どうしようかと思っていたある日、父親から「うちの会社をどう思う」と聞かれることがありました。私が「もっと売り方を工夫しない

と。若い世代に受け入れられる商売をうまくしないとアカン」などと偉そうなことを言ったものですから、大げんかになってしまいました。「就職活動は失敗するわ、揚げ句の果てに父親の商売は下手くそと言うわ、それなら自分でやってみい」と怒鳴る父。売り言葉に買い言葉で「じゃあ、やったるわ」と言い返したのがきっかけで、現在の「たこ家道頓堀くくる」の前身となる「KU/KU/RU道頓堀店」を、大阪松竹座の前に開くことになりました。学生兼店長として働き始めたのは、大学4年の12月でした。

池内 開店から数年後に、私も当時の職場の仲間と行かせてもらったことがあります。変わったことをする面白い店だなと感じたのを覚えています。当時の道頓堀には、たこ焼き屋はほとんどなく、珍しかったですね。

永尾 どうしたら「たこ焼きってカッコイイ」と思ってもらえるかと独自のメニューを開発し、若い女性に受け入れてもらえるよう

制服から内装まですべて自分でイメージを出して決めました。人気を集めたかったので、トレンドの最先端であったディスコで無料試食をしたり、いろいろな工夫をしました。当時はアルバイトを募集しても応募がなく、関大一中、一高からの仲間はずいぶん助けてもらいました。ところが客は期待したほどには来ず、このままつぶれるんじゃないかという日々が、1年以上続きました。でも、その当時から「いつかはニューヨークのマンハッタンに店を出して、大阪名物たこ焼きを世界中に広めるんだ」と夢を語っていました。

◆グルメとエンタメで、道頓堀をグローバル化

池内 世界に広めるといえば、2010年には上海万博に出展されましたね。中国の人たちの反応はどうでした？

永尾 大盛況で長い行列もできました。単に食品を売るだけでなく、見た目の楽しさやエンターテインメント性をしっかりアピールしたところが人気の理由だったと思います。“たこ焼き”はグローバル化できると確信しました。それからは世界を意識するようになり、道頓堀を毎日万博のようにしたいと考え始めました。今は道頓堀商店会の副会長としても、大阪文化の発信に努めています。海外への発信だけではなく、日本が大好きで海外から訪日する外国人の皆さんに、いかに対応するかもグローバル化だと感じています。道頓堀は2015年に開削400周年を迎えました。グルメとエンターテインメントの街として道頓堀の持つポテンシャルを生かしながら、次の新しい100年、500周年に向けた姿をしっかりと考えていきたいと思っています。

池内 本学は昨年創立130周年を迎え、その記念事業の一つとして「関西大学なにわ大阪研究センター」を開設しました。センターの活動には、江戸時代の芝居小屋・道頓堀五座の景観をCGによって復元する研究もあり、道頓堀商店会にはご協力いただいています。また、本学の留学生が道頓堀商店会主催の盆踊りにチームで毎年参加させてもらっていますね。

永尾 元々は町内会でしていた盆踊りですが、外国人観光客がどんどん参加するようになり、5年前から「道頓堀盆おどり国際ナショナル」という名前を付けて開催するようになりました。今ではこのためにわざわざ来日する外国チームもあります。

◆少子高齢化が進んでも、社会の活力を失わないために

池内 新しい事業やグローバル化へ挑戦されるお話は、教育の立場からも非常に共感するところがあります。2015年にオープンされた「なめがたファーマーズヴィレッジ」も大胆な挑戦ですね。茨城県行方市で廃校となった小学校やその周囲の耕作放棄地を開墾して造られたそうですね。私も開業時に行かせてもらいましたが、地元の農協と話し合いを重ねながら信頼関係を築き、実現に至るのに10年を要したと聞いて、その実行力と求心力に感心しました。





永尾 俊一 (ながお としかず)
1963年大阪府生まれ。79年関西大学第一中学校卒業、82年関西大学第一高等学校卒業。85年関西大学在学中に、「タコヤキハウス KU/KU/RU道頓堀店」(現 たこ家道頓堀くる)開業。86年関西大学法学部卒業。87年「おいもさんの店 らぼぽ」開業。99年「農業生産法人 育みの里しろはと」を創業。2010年白ハト食品工業株式会社代表取締役社長就任。学校法人関西大学評議員。

永尾 理事長にお越しいたいた時は10万坪でしたが、今はもう20万坪になりました。さつまいものお菓子を製造する千坪の工場も造りました。

私たちの一番の心配事は少子高齢化です。すべての産業が少子高齢化で人手不足ですが、農業は特に深刻です。さつまいもを作る農家が、このままでは無くなってしまいます。そうすると、当社はお菓子が作れません。農家を増やすためには、大阪や東京で工場を造るより、当社が産地に進出し、若者を連れて行くことによって、産地の活性化を図る必要があるのではないかと考え、農業体験型テーマパークを造りました。

池内 教育産業においても、少子高齢化は大変深刻な問題です。大学間競争は激化し、今後も大学の統合や再編成が進むでしょう。そのような厳しい状況下でも、本学はこれまでの優れた研究を更に飛躍させ、豊富な研究実績に支えられた教育を提供する大学であり続けなければなりません。そして、研究成果を社会に還

今の自分の器を超えるような夢や目標を持ち、できればそれらは周りの人達の人生をも良くするものがないですか。

元すると共に、放っておけば活力を失ってしまう社会に、元気を与える事業を創造できる人材を育てることも大学の使命だと考えます。

創立130周年記念事業を推進するにあたり、起業を考えている人への支援も大学の重要な責務だという考えから、「関西大学梅田キャンパス」を開設しました。愛称「KANDAI Me RISE」はMe(自分)が、KANDAI(関大や梅田キャンパス)を利用して、未来に向けてRISE、すなわち大きく飛躍し資質を向上させるとの願いを込めたもので、本学の学生が考案しました。異業種交流ができるコワーキングスペース、スタートアップ支援、社会人のための大学院教育などの機能を盛り込んでおり、本学の知的資源を社会に還元する拠点として、起業に関する相談や各種セミナーなど多彩なコンテンツを提供しています。

永尾 大学と産業界との連携は今後ますます重要になっていくでしょう。今も当社は関西大学と一緒にさまざまな取り組みを行っています。化学生命工学部の河原秀久教授の天然素材工学研究室と、飲み込む力の弱いお年寄りでもおいしく食べていただける「おいもぬくもりパン」を共同開発し、らぼぽベーカリーで販売しています。また、片倉啓雄教授率いる生物化学工学研究室とは、さつまいもの皮や端材からバイオエタノールを抽出し、トラクターなどの燃料に利用する研究を共同で進めています。

◆「空振り三振OK」思いっきり振り切れ

永尾 与えられる課題には真面目に取り組むけれど、自分の目標が自分で見つけられない若者が増えているように思うのですが、理事長はどうお感じになりますか？

池内 日本の社会が、学生・生徒に自分のやりたい、学びたいことを見つけることよりも、中学、高校、大学、就職と決まった進路をとる直線型の生き方を勧めてきたことにも問題があると思います。その結果、就職してもそれが自分のやりたい仕事なのか分からず、3年もしないうちに約3割が辞めてしまう。これには若い世代を大切に育成する時間や労力をかけられない雇用側の事情も関係していますが、非常にもったいない話です。

私論ですが、18歳で一度社会に出てみるのもいいと思うのです。社会であれ、仕事であれ、大学では得られない経験をして、その中で学びたいことを見つけてから大学に入ってもいいのではないかと。高校を卒業後、何となく大学に進学し、卒業が目前に迫ってからようやく「これから何をしたらいいのか」と考えている者が多い日本の現状を危惧しています。私が天六学舎で夜間部の事務職員をしていたころ、学生は昼に働き、夜は法律の勉強をしたいと目を輝かせていました。そんな真摯な学習意欲を持った学生を育てたいという強い思いを、私は今でも持っています。皆がいったん働いてから大学進学するというのは極端ですが、自分なりの夢や目標を持って日々勉強することを、大学は教えていかなければならないと思います。そうすれば「この日本を我々が引っ張っていく」という気概のある学生がもっと出てくるはず。学生が高い志を持ち続けるために、どう刺激を与えられるのかを、私たちは考えていかなければならないでしょう。

永尾 学生の方々は真面目なので、失敗を怖がっているのかもしれない



◀梅田キャンパス「KANDAI Me RISE倶楽部」

れませんね。昔は「失敗は成功のもと」とよく言われたものですが、今の若者はどう思っているのでしょうか。手堅く80点を取りにいこうとするより、虚勢を張ってでも120点を目指してほしいものです。社員には、前向きに挑戦してもらうために「空振り三振OK」と常に伝えています

池内 「空振り三振OK」、良い言葉ですね。空振りどころか、振らない者もいるかもしれません。やはり、何も行動を起こさない者よりも、トライした結果が失敗であっても、経験を吸収して大きくなっていく者を認める社会の懐の深さが大切ですね。失敗を恐れず挑戦し続ける人材をどう育てるか、企業も大学も一緒に考えなければなりません。

◆“ワクワク”失敗を楽しむ心・夢・情熱・愛嬌・スキル

永尾 学力偏差値の高いことも大事ですが、それ以上に人生偏差値を上げようという話もよく社内です。人生偏差値というのは、強く生き抜く力。挫けない、負けない力のことです。

人生偏差値を上げるためにはどうしたらいいのか。1つ目は“ワクワク”失敗を楽しむ心です。失敗したら「次はもっとよくなるようにしよう。そこに自分の伸びしろがまだある」と、失敗を無駄にしないことです。2つ目は夢や目標を持つこと。あとはしっかりやり抜く情熱と愛嬌。夢を実現するには、周りの協力は不可欠ですから、仲間が自然に増えていく人間性が大事ですね。また、夢と情熱さえあれば、スキルはおのずとついてくるでしょう。ワクワク失敗を楽しむ心と、夢と情熱と愛嬌とスキル。この5つが掛け算となって、人生偏差値が上がるのです。

今の自分の器を超えるような夢や目標を持ち、できればそれらは周りの人達の人生をも良くするものがないですか。そうすると仕事が楽しく、深く、太くなっていきます。自分の利益や好みだけを優先しているとすぐに仕事が嫌になるものですが、世の中に役立っているのだと自分の存在価値を知った時に、人は「この仕事を選んでよかった」と感じるでしょう。それを早く見つけるために、まずは目の前、自分が選んだ仕事で思いっきりバットを振ってほしい。失敗から学び、小さな成功を積み上げていけばいいのです。先輩や上司はそれを認め、時にはフォローし、お互いの長所を高めていく、そういうチーム作りをしないと社員には話しています。

もう一つ、最近私が若い世代に言うのは、5年後の競争相手は、間違いなくAIだということです。AIに振り回されず、AIを上手にコントロールできる人間になり、ロボットにできない自分の特長を磨こうといった話をしています。

放っておけば活力を失ってしまう社会に、元気を与える事業を創造できる人材を育てることも大学の使命だと考えます。



池内 啓三 (いけうち けいぞう)
学校法人関西大学理事長。1943年旧満州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員。96年総務局長。2000年理事。法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園園長を経て、08年専務理事、12年理事長に就任。

池内 社会人も学生も、現状の社会だけを見ては駄目ということですね。福島・天六学舎時代からの社会人教育の伝統を引き継ぎ、起業家育成や異業種交流の拠点として展開している梅田キャンパスは、これからますます重要な役割を果たすことになるでしょう。変化を恐れるのではなく、勇気を持って立ち向かえるように、背中を押してサポートするシステムを作っていけたらと考えています。さて、白ハト食品工業は今年、創業70周年を迎えられますね。今後はどのような挑戦をされますか？

永尾 さつまいもを中心に農業分野に進出したことで、当社は新たな座標軸を得ました。今後は農業の6次産業化にとどまらず、地域との交流や食育などいろいろな要素を足していきたい。そして、農業をもっと素敵にしていきたい。そう考えています。

池内 永尾社長のようなアイデアマンが関西大学の先輩にいるわけですから、その知恵をお借りしながら、イノベーションを創出する人材の育成に、今後も取り組んでいきたいと思っています。



●ナチュラルスティックポテト



■白ハト食品工業株式会社
“いも・たこ・なんさん” 専門の製造販売。6社からなる白ハトグループの中核企業。1947年大阪府天王寺区で創業し、今年創業70周年を迎える。現在の本社は守口市。さつまいもの洋・和菓子を製造販売する「おいもさんのお店 らぼぽ」、たこ焼き・明石焼きの「たこ家道頓堀くる」などを全国に展開する。スーパー、コンビニ、食品メーカー、回転寿司チェーンなどに、さつまいも原料の惣菜・菓子販売するBtoBビジネスも行う。日本で流通する大学芋の80パーセントは同社の製造によるもの。



ポテトアップルパイ



スイートポテト



大たこ入りたこ焼き



将来はベンチャー企業を支援する ベンチャーキャピタリストに

留学や留学生との交流で、多様な価値観と将来像を発見

●システム理工学部 4年次生
藤原 俊樹 さん

留学先のペンシルバニア大学でダイバーシティ(多様性)に触れ、早期に将来像を確立する重要性を体感した藤原さん。「ベンチャーキャピタルこそが日本経済を活性化させる」との信念を胸に、今春、外資系企業に活躍の場を移す。留学で「本当に自分がやりたいことが見つかった」と語る藤原さんの描く理想のリーダー像とは。

藤原 俊樹—ふじわら としき
■1994年、京都府舞鶴市生まれ。京都府立東舞鶴高等学校卒。システム理工学部4年次生。2年次の秋からペンシルバニア大学に留学。帰国後は南千里国際プラザ留学生寮に入寮し、留学生をサポートするレジデント・アシスタント、副寮長を務める。趣味は読書、ゴルフ。



頻りに顔を出す千里山キャンパスの国際部交流室で、留学を決意した理由や自身の変化について、端正な顔をほころばせながら話し始めた。

関西大学システム理工学部への進学、そして留学への意識は高校時代に芽生え始めた。「高校から本格的に週5日通うことになった塾が特殊で、受験には関係ないフィボナッチ数列や、海外留学の体験談などを講師が話していました」。黄金比と密接に関係するフィボナッチ数列の奥深さに衝撃を受けて理系への進学を決意し、海外留学体験談から刺激を受けて留学を志すようになった。「関西屈指の総合大学で、キャンパスも綺麗で広く、研究環境や留学制度が整っている関西大に入学しました。1年次生の時はアルバイトとサークルに明け暮れていましたが、2年次生の春に留学を決意し、秋から留学しました」。

関西大の認定留学推奨校の1つであるペンシルバニア大学での留学生活で、藤原さんは想定を超える収穫を得ることになった。1区画10カ国10人の留学生が住む国際寮に入寮し、語学を中心に「リーダーシップ論」「コンピュータサイエンス」などを受講。イギリス、ブラジル、スペイン、サウジアラビアなどのさまざまな国の留学生と共同生活し、英語で授業を受ける毎日。「彼らはみ



南千里国際プラザ留学生寮の仲間たち。共同生活を送りながら異文化交流ができる

な「私は将来こうなりたいから、今ここで勉強している」と明確な意思を持っていました。例えば、「ニューヨーク・タイムズ」の記者を目指していたり、親の会社を継ぐために経営学を学んでいた。中途半端な考えに対しては「なぜ? どうして?」と質問攻めに遭いましたね。ディスカッション中心の少人数講義では賛成・反対の立場から意見をぶつけ合い、政治・宗教の話では日本の国際的な立ち位置を再認識する契機になった。毎週金曜日に開催されるパーティーにも積極的に参加し、異文化に触れダイバーシティの重要性を体感する日々を過ごした。帰国後は南千里国際プラザ留学生寮に入寮し、留学生をサポートするレジデント・アシスタント(RA)を務め、翌年からは副寮長の大役を担った。「寮には20数人の日本人RAと約150人の留学生が住んでいます。いろいろな国の人がいますので、全く新しい価値観や意見に刺激を受けています」。

今春から外資系企業に就職する藤原さん。「医療機器の営業職でのスタートになりますが、3年後にはマーケティングを、その3年後にはグローバルマーケティングを経験したいですね。今後の自分の成長を見据え、新しいステップにチャレンジできる環境ではないかと感じています」。将来の夢はベンチャーキャピタリストとして起業すること。「海外ではベンチャー企業への投資が盛んです。日本企業のトップからも『新しい挑戦への投資が日本経済を潤す』との意見は耳にします。実際に働き出してみないと自分の能力が分かりませんが、30代ではその道に足を踏み入れたいです。さまざまなリーダー像がありますが、後ろを振り向かなくても皆がついてくるリーダーになることが理想ですね」。



GREETING WORKS

時代は変わっても
人とのつながりは普遍的なもの
野球部で全国準優勝を果たし、頑張れば夢はかなうと知った

●株式会社グリーティングワークス 代表取締役
徳丸 博之 さん —文学部 1992年卒業—

ITサービス業界で熱い視線を浴びる徳丸さん。銀行員から家業建て直しのため、印刷工場を継承し営業として「できないとは絶対言わない」スタイルで何でも引き受け、復活へと導いた。体育会野球部で培った人脈と経験をフルに生かし、「頑張れば夢はかなう」を実践している。徳丸さんが大切にしている、IT全盛の時代にも普遍的なものとは何だろうか。

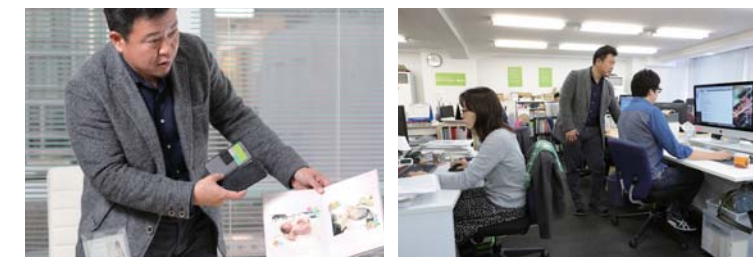
徳丸 博之—とくまる ひろゆき
■1969年大阪府四條畷市生まれ。88年明星高等学校卒。92年関西大学文学部卒。同年三和銀行(現三菱東京UFJ銀行)入行。2000年に退行し、個人で事業を立ち上げる。03年、株式会社につこう社(現株式会社グリーティングワークス)を設立。04年から挨拶状のネット販売事業を始める。趣味は少年野球の指導など。

たくましい姿に人を引きつけるパワフルな笑顔。人とのつながりを何よりも大切に、ITサービス業界を先導する人物がいる。インターネットで挨拶状や年賀状を販売するグリーティングワークスの徳丸社長だ。関西IT活用企業百撰「優秀賞」受賞2回、経済産業省中小企業IT経営力大賞2013にて認定企業に登録されるなど、同社のサービス利用者数も右肩上がり。「ご利用者は現在10万人ですが、サービスの浸透と社会への貢献を考慮すると、目標は100万人です」。

印刷工場を営む両親のもと、大阪市城東区で育った。「幼少から野球少年で、高校野球では大阪府のベスト16まで勝ち進みました。地区大会で立浪義選手率いるPL学園に敗れたことは今でも覚えていますよ。学業と野球を両立できると思い、関西大学文学部に入学しました。当時のドイツ文学科は男子学生が少なかったですね。その分結束が固く、勉強以外は野球漬けの大学生活でしたが、学科の仲間とも今でも仲良くしています」。関西学生野球リーグの覇者として全日本大学選手権に出場し、「6番レフト」で決勝進出に貢献した。「成績が悪い時でも起用してくれた監督をはじめ、周囲の方には感謝しかありませんでした。まさか全国で準優勝になるとは…。あきらめないで頑張れば、夢はかなうとその時に実感しました」。

大学卒業後は「野球もできて、お金の流れを勉強しながら、世の中での経営者と会える」との理由で三和銀行(現三菱東京UFJ銀行)に入行。平日は他の行員同様に仕事をこなし、週末は社会人

野球に専念した。入行8年後に退行し、時代の流れを受け厳しい状況に陥っていた家業の立て直しのため、「営業マン」として無我夢中で働いた。「三和銀行の看板はもうありませんでしたが、関西大学野球部のOBや先輩、後輩の人脈を頼り、積極的に営業をしました。人材紹介から、阪神タイガースのおにぎり販売まで、「できません」とだけは絶対に言わないようにしていましたね」。何でも引き受ける徳丸さんに、本業の印刷での受注も増え始めた頃、挨拶状の販売に可能性を見いだした。「銀行員は異動の時期に挨拶状を送ります。ダイレクトメールに『元三和銀行員』と書いたところ、結構反響が良くて。全国の支店に営業をかけましたね。挨拶状のハガキをインターネットに代えたらどうなるかと思い、2004年に始めたのが「挨拶状ドットコム」です」。



「人とのつながりや思いは普遍的なもの」との信念は、IT全盛時代の今も心に響いたのだろう。写真にスマホをかざすと動画を楽しむことができる「pimory」事業は、ママさんへのプレゼントとして全国の産婦人科から商品開発の要望が舞い込むほど。「この人と一緒にいて面白いか」を採用基準の一つに、今では40人超の社員が働いている。1月には年賀状をスマホで簡単に整理できるアプリ「カシャポ」をリリースした。「変わっていくものがあれば、人間である限り変わらないものもある。時代と共に媒体は変わるけれど、礼儀礼節や思いやる気持ちは同じですから」。関西で成長させてもらった思いを胸に、社会の公器となる会社を目指す徳丸さん。当面は3年計画で利用者を50万人に、そして全国区のボーダーでもある100万人突破を目指している。

■研究最前線

グローバル・ロジスティクスの研究

グローバル化時代におけるロジスティクス

人々のくらしと物流政策を紐解く

●商学部
飴野 仁子 教授

物流をうまく管理しより効率化した物流システムをつくり上げることは、企業の収益性や競争力の向上に大きな影響を及ぼす。物流は国内の事業活動のみならず、世界規模のビジネス展開にその役割を果たす。先進的な物流の考え方として、ロジスティクスが普及している。飴野仁子教授は、経済のグローバル化が進展する中で、世の中を支えるロジスティクスに焦点をあて、今後の社会経済の成長に必要なしくみを研究する。



■グローバル化する国際物流

——近年、世界の物流はどのような動きをみせていますか？

世界的にみれば、物流量は年々増加の傾向にあります。グローバル物流の成長の中心は、中国を筆頭にした東アジア経済圏です。貿易が活発化し、国境を越えて経営活動を行うグローバル企業へ、活動領域と規模を拡大する企業が出現しています。世界各地からの原材料・部品・労働力・資本蓄積の状況を考慮して、世界規模で最適調達、最適生産、最適販売を行っています。企業が世界各地での調達、生産、販売活動を活性化すればするほど、物流は増加します。近年では、製品間や工程間で国際的な水平分業が広がり、製品だけでなく部品や半完成品の国際物流が増えています。

——日本の国際物流はどのようになっていますか？

日本の国際物流量は減少傾向にあります。日本企業もグローバルに展開していることから、例えば、韓国や台湾から部品を調達し、中国の工場で組立て製品にして、欧米の市場へ輸出するというように、日本企業の製品であっても、日本を経由しない場合も増えてきています。身の回りの電化製品を考えてみてください。新しい製品が発売されるたびに、製品の仕様が変更され機能が向上しているにもかかわらず、サイズはコンパクトで軽量化されている製品は珍しくはありません。出荷量が増えている場合でも、貨物量は増加するとは限りません。

日本の国際物流を担う手段は船舶と航空機です。海上貨物と航

空貨物の輸送動向は、輸出入合計を重量と金額でみると、輸送トン数ベースでは、海上が99.7%、航空は0.3%ですが、金額でみると、航空は25%前後を占めています。船舶での輸送期間は、海上輸送だけでも日本から北米まで約2週間、欧州へは約1カ月を要します。スマートフォンやパソコンなど製品のライフサイクルが短くなっている昨今では、時間コストの削減は物流にとって大きな課題のひとつです。一度に大量にモノを運んで在庫コストを抱えるよりも、航空機の利用により、必要な時に必要な量を運ぶという選択も可能です。豊かさゆえに消費者のニーズも多様化する中で、製造業者も物流事業者も、さまざまな努力が求められています。——物流に注目した企業経営の例はありますか？

トレンドのファッションを手頃な価格で販売するファッションチェーンのブランド、ご存じZARAです。ZARAは自らが企画・製造した商品を、自ら運営する店舗で消費者に直接販売する形態をとっています。物流はビジネスの肝です。なぜならトレンドファッションは鮮度が命ととらえているからです。ZARAでは、製品の過半数を本拠地のスペイン、ポルトガルなどで生産し、残りはヨーロッパやアジア諸国で生産しています。各地で生産された製品は、その地域で販売される製品でもいったんスペインに集め、店舗ごとにまとめて再度世界各地へ配送されます。新商品を企画から完成品まで4週間でつくり上げても、店舗に届けるまでの輸送に4週間かかっているのは意味がありません。そのためアジアなどへは空輸し(往復とも製品を積載)、年間約2000便の航空機をチャーターして出荷から48時間以内に届けられます。商品は多品種少量で生産し、店頭でお客様の反応が良かった商品については、すぐに新しい商品を生産して店頭へ届けます。最低限必要な数しか生産せず売り切れたらおしまい。基本的につくりおい

● 1980年		● 2015年(報道値)	
港湾名	取扱量	港湾名	取扱量
1 ニューヨーク/ニュージャーシー	195	1 上海	3,654
2 ロッテルダム	190	2 シンガポール	3,092
3 香港	146	3 深圳	2,420
4 神戸	146	4 寧波-舟山	2,062
5 高雄	98	5 香港	2,011
6 シンガポール	92	6 釜山	1,947
7 サンファン	85	7 広州	1,762
8 ロングビーチ	82	8 青島	1,751
9 ハンブルク	78	9 ドバイ	1,559
10 オークランド	78	10 天津	1,410
13 横浜	72	29 東京	463
16 釜山	63	54 横浜	279
18 東京	63	57 神戸	271
39 大阪	25	58 名古屋	263
46 名古屋	21	72 大阪	222

出典: CONTAINERISATION INTERNATIONAL YEARBOOK 各年版
及び国土交通省港湾局 公表資料より作成



Global Logistics

て在庫するという発想はありません。店頭には毎週決まった曜日に、常に旬の商品が並ぶというしくみです。商品を多品種少量・スピード生産し、売れ行きが良く在庫切れになったからといって、サプライチェーン全体のリズムを崩さない、一定のリズムの物流を重要視しているユニークな事例といえると思います。

ロジスティクスの視点から未来を考える

——日本でも戦略が必要ですね。

東南アジアの都市国家で面積の小さなシンガポールは、海上コンテナの取扱量において、中国の上海と世界の1、2位を競っています。鉱物資源等を持たない国ですが、地理的に交通の要衝に位置する利点を生かし、国際的なハブ港湾、ハブ空港として、高度な交通・物流のインフラを整備し、人・モノ・おカネ・情報が集まるしくみを現在も維持しています。物流インフラを資源としてうまく利用するような知恵が求められています。

日本に「物流」という用語が登場するのは高度経済成長が始まった1950年代後半のことです。国の政策として物流がまとめられるようになったのは1997年からです。他分野と比べて比較的日進月歩に社会経済環境の変化が、一般社会でもやっと物流≠輸送という認識を持たざるを得なくなったのだと思います。

——今後どのようなことを考えていく必要があるのでしょうか？

現代では、企業も個人の生活も物流がストップしてしまうと、たちまち生活が立ち行かなくなってしまいます。しかし、日本の国内の市場を見渡せば、かつてのように毎年物流量が右肩上がりに増加するというような時代とは違うと思います。「量」ではなく、今こそ物流の「質」が問われていると思います。経済活動の

ひとつである物流は、地球環境問題と切り離して考えることはできません。昨今のインターネットの普及から通信販売の伸びには著しいものがありますが、今後はこれまでのように、企業・消費者の物流ニーズに際限なく応じるようなものではダメだと思えます。荷主企業はビジネス上で競合する関係でも「物流は共同」で取り組むことができますようになるでしょうし、消費者のひとりである我々は、物流はタダという感覚のもとに、安易な時間帯指定や不在宅に何度でも配達に行かざるを得ないようなしくみは改めて、荷物の受け取り方にも工夫が必要でしょう。持続可能な社会を考えれば、そもそも物流需要を輸送容量にあわせるという発想も持ちあわせなければならない場合もあるでしょう。輸送スペースに空きがなければ現実に輸送はできないのですから。荷台の空きスペースが多いままにトラックが行き交うこともナンセンスです。日本は今、成熟社会を進みつつありますが、東アジア諸国の中でも早晩同様の経験をする国々が現れるでしょう。社会を支えてきた物流によって、ちょっと先の未来をもっと豊かに潤すことができるようなそんな新たな物流政策を考えていきたいと思っています。自由で柔軟な思考と発想が鍵になりそうです。

● 飴野ゼミの取り組み「教科書宅配サービス」

飴野ゼミのテーマは、「物流からビジネスを変える」。ヤマト運輸株式会社の協力を得て、ゼミ生のアイデアで生まれたサービス。宅配便を送る経験がほとんどない学生に、宅配の受取りについて考えてもらおうと、春・秋学期冒頭の期間限定サービスとして学生達自身が考案したものを。

研究最前線

損傷した鋼橋の簡易補修の研究

叩いて亀裂閉口、当て板接着補修
簡易・安価に疲労寿命向上

橋梁を安心・安全、長く使うために

◎環境都市工学部
石川 敏之 准教授

日本では、国土交通省が定める設計基準「道路橋示方書」によって、道路橋を100年以上使用できるように設計することが求められるようになった。一方で高度成長期に集中的に建設された橋梁の老朽化が課題となっている。石川敏之准教授が取り組む鋼橋の簡易で安価な補修技術の研究開発は、適切なメンテナンス、維持管理を実施し、道路橋という社会基盤構造物を長く安心して使用できる体制の確立に役立つものと期待されている。



鋼橋を100年使えるようにするための補修技術

— 橋梁の維持・管理に関する研究をされているそうですね。

100年以上使用できるような橋梁の耐久性を実現するためには、適切な維持・管理が必要です。そこで2014年から、道路橋は5年に1度の頻度で近接目視により点検を行うことが道路法施行規則で義務付けられました。このサイクルで定期点検を行うのであれば、大掛かりな補修工事が必要になる前に、ある程度の効果のある簡易な補修を続けながら、耐久性を維持していくことも可能になります。そのための簡易で安価な補修技術、特に鋼の橋梁に関する技術の研究開発をしています。

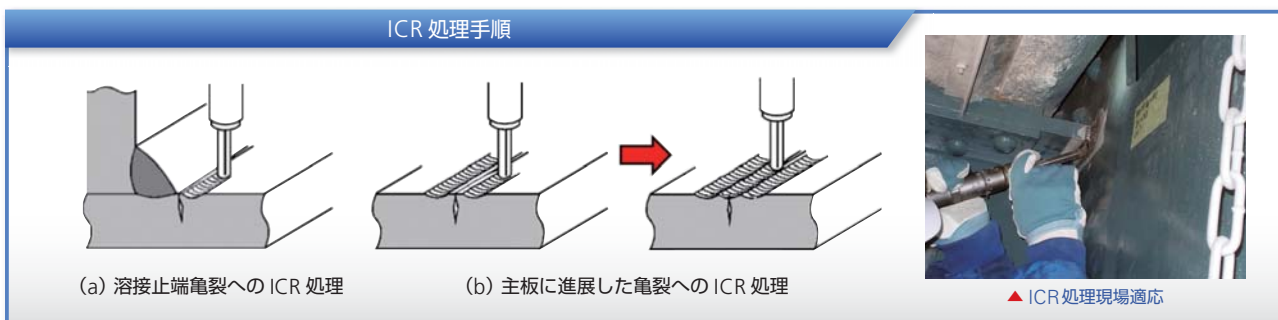
— 具体的に、どんな技術の研究をされているのですか？

大きく分けると2つあります。1つは鋼橋の疲労亀裂近傍を叩いて、亀裂表面を閉口させる技術。ICR処理(Impact Crack Closure Retrofit Treatment)といいます。これは、名古屋大学で私が助教をしていた時に、山田健太郎名誉教授と開発した工法で、比較的小さな亀裂に対しては、亀裂の表面を叩くことで、亀裂の進展を遅延させる。場合によっては完全に停止することができるというものです。

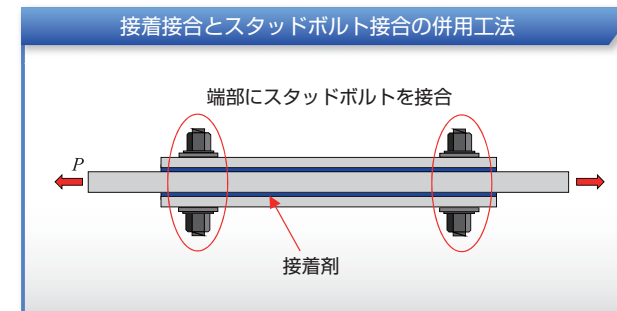
鋼橋は、鋼板を組み立てて溶接して製作しますが、溶接の端部などに力が集中し、繰り返し荷重を受けると亀裂が生じることがあり、この疲労亀裂が耐久性を損なう原因となっています。一般

的に、亀裂の先端に孔を開けて亀裂の進展を止める、当て板をするなどの補修方法がありますが、ICR処理は叩いて表面を閉じるだけで亀裂そのものを除去しているわけではないため、積極的に採用されることはありませんでした。しかし、試験データを蓄積することで、適用範囲が明らかになり、阪神高速道路の鋼橋での試験施工やNEXCO中日本の鋼橋で実施されるようになりました。従来の補修に比べ、叩くための空気動工具(フラックスツッパー)、小型のコンプレッサーおよび発電機以外に大掛かりな設備が不用、作業時間も数分、コスト面においてもメリットの大きい工法ではないかと思っています。叩き方は30分程度の講習で、学生でも習得することができます。これまでに、補修作業を行う企業への指導も行い、技術の普及も図ってきました。

もう一つは、当て板接着補修という技術です。腐食損傷のある箇所に対しては、鋼板を高力ボルトで接合する方法が一般的ですが、より簡易な補修法が望まれています。これに代わって期待されているのが、炭素繊維強化樹脂板(CFRP板)による接着補修法です。この方法は疲労亀裂の進展の防止にも効果が期待できます。接着剤でCFRP板を貼り付けるだけで簡単ですが、当て板の脆性的な剥離や耐久性が懸念されています。しかし、接着の効果を数式で解析することで、どういう条件で剥がれるのか、剥がれやすさの評価もできるようになってきています。



鋼板で当て板補修をする場合、接着した鋼板の端部をスタッドボルトで軽く締め、接着剤とスタッドボルト接合の併用によって剥離を防止する工法を現在、研究しており、剥離の防止効果が高いことが明らかになっています。CFRP板は軽量で作業現場でのハンドリングが良く、工期の短縮も期待できますが、鋼板でもある程度の大きさまでならば作業の負担になる重さにはなりませんし、CFRP板よりも安価というメリットがあります。今後は、ICR処理か接着補修か、亀裂や腐食の程度や箇所によって補修法を選択できるような技術を開発・提案していきたいと考えています。



橋梁ドクターとして、近畿各地の橋梁を診断

— こういった技術の開発が急がれるほど、日本の多くの橋梁が問題を抱えた状況なのではないでしょうか？

遠くから眺めるときれいな橋梁も、近づいて見ると疲労亀裂が発生していたり、塗膜が剥がれてさびが生じていたりしているような状況は多くなっています。特に鋼橋が多く、重交通となる大都市圏には、損傷箇所のある橋梁が多く見られます。近年の橋梁は、金属疲労に対して安全性を確保する疲労設計がされていますが、古い橋はそのような設計を取り入れていませんので、確実な点検が不可欠といえるでしょう。

使えるものを長く安全に使うために、少しの補修で延命させることは現実的な選択だと考えています。それがまさに私が取り組んでいる研究です。疲労亀裂や腐食損傷のある橋梁は数多くありますが、それらをすべて補修するだけの予算が確保できなければ、小さな亀裂は簡易な補修で延命し、各年度の予算を平準化する。私の研究する技術は、橋梁の持続的な維持管理をするために役立つのではと考えています。

— 橋梁ドクターをされているということですが、橋梁ドクターとは？

国土交通省近畿地方整備局の委嘱を受けて、近畿地方整備局が管轄する橋梁の損傷判断や補修について、高度な専門的判断を必

要とする場合に、技術的な助言や指導を行うのが橋梁ドクターの仕事です。私は2014年から引き受けていて、年に数回、近畿各地の橋梁に足を運び、高所作業車に乗って調査することもあります。点検データは事前にいただく場合もありますが、やはり現場を見ないと判断はできませんから。

理論的な探究を志し、橋梁メーカーから大学へ

— そもそも橋梁の研究を始めたきっかけは？

小学生の頃から橋梁が好きで、開通したばかりの大鳴門橋を見に連れて行ってもらったのが、興味を持ったきっかけです。大学では土木工学を修士まで学び、修了後は橋梁メーカーで4年半の間働きました。将来、必ず訪れる橋梁の補修の問題に対して、理論的な方向から考えたいと思い研究の世界に戻ってきました。

— 今後の抱負を教えてください。

引き続き、簡易で効果的な補修法の研究に取り組んでいきたいと思っています。研究にあたっては、事実をしっかりと見つめ、さまざまな角度からデータを分析することを心掛けています。接着補修は多くの人が補修法としては信頼がけないと思いましたが、実験データを蓄積し、理論的な評価を行うことで、効果が期待できる接着補修法が明らかになってきました。今後も、多くの人が疑うような簡易で効果的な補修・補強技術を開発したいと思っています。

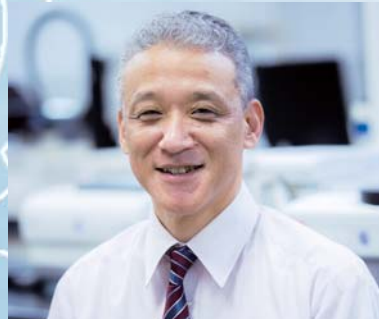




「人に届く」関大メディカルポリマーによる 未来医療の創出



文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に選定



◎ 医工薬連携研究センター長
化学生命工学部
大矢 裕一 教授

文部科学省の2016(平成28)年度「私立大学研究ブランディング事業」に、医工薬連携研究センター長・大矢裕一 化学生命工学部教授が率いるプロジェクト「『人に届く』関大メディカルポリマーによる未来医療の創出」が選定された。事業期間は2016～2020年度の5年間。当事業は、学長のリーダーシップの下、優先課題として全学的な独自性を大きく打ち出す研究に取り組む私立大学を重点的に支援するもので、今年度より開始。18歳人口の減少や地域社会の衰退への懸念が高まる中、私立大学が持つ強み・独自性をより一層強化し、私立大学全体としての多様性を発揮させることで、グローバル社会において日本が持続的に発展していくための一助となることが期待される。本年度は198校からの申請があり、「タイプA(社会展開型)」に17校、「タイプB(世界展開型)」に本学を含む23校が選定された。関大メディカルポリマー(KUMP)は、本学が開発中の未来医療を革新する材料。KUMPを基軸に「世界の人々に届く」日本発の医療器材の開発を行い、医療基盤を支えるものづくりの重要性を発信し、今まで表現し得なかった未来医療への貢献を目指す。

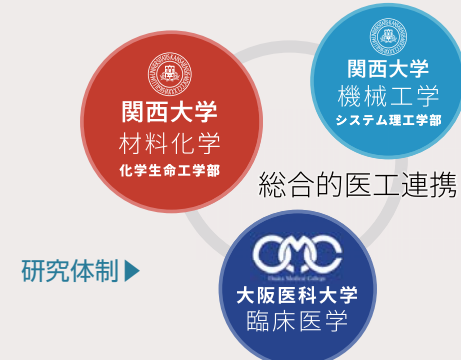
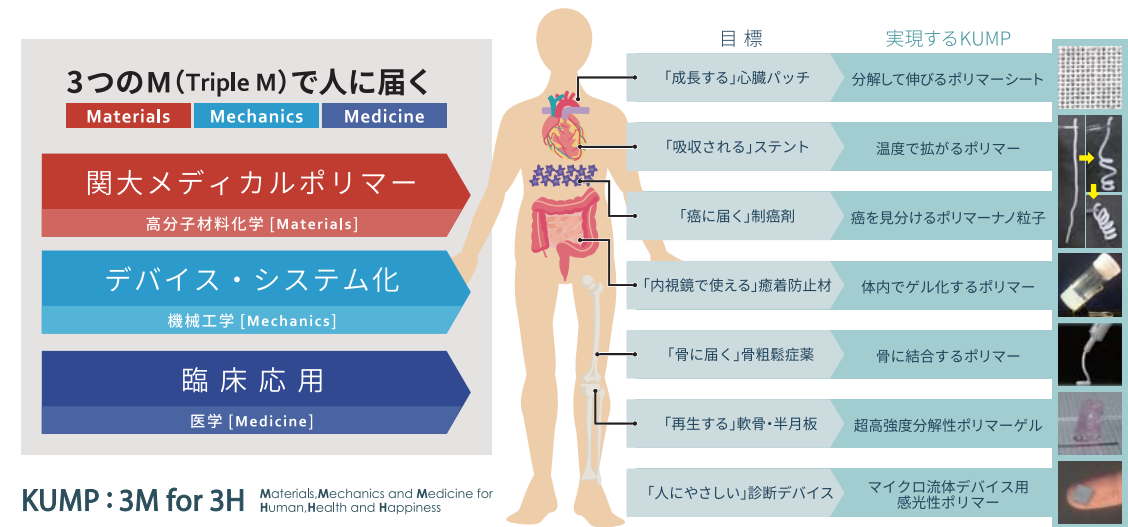
◎ KUMPを基軸に、3つのM(Materials, Mechanics, Medicine)で 「人に届く」医療器材・システムを開発する



本学では、これまで先端科学技術推進機構に設置された医工薬連携研究センターを中心に、特に材料化学に立脚したメディカルポリマー研究を独自に推進してきた。さらに、大阪医科大学と強固な医工連携体制を築き、臨床医のニーズに基づいた医療用の材料・システムを開発。国際競争力のある医療機器の製品化に向けて、臨床現場(患者と医療従事者)に届ける研究を進めてきた。

超高齢化社会の今、医療に必要とされるのは、治療と診断における患者の肉体的・精神的・経済的負担の軽減。手術時の開口部を小さくしたり、投薬の量や回数を減らしたりする方向へと進んでおり、こうした侵襲の程度が低い(低侵襲)治療と診断を実現す

「人に届く」関大メディカルポリマー (KUMP)



る医療機器の開発が喫緊の課題となっている。また一方で、日本では、医療機器のほとんどを輸入に頼っていることが医療費総額を押し上げる一因となっており、「メイド・イン・ジャパン」の医療機器の開発が望まれている。

このような背景から、医工薬連携研究センターでは“KU-SMART (Kansai University Smart Materials for Advanced and Reliable Therapeutics) プロジェクト”を始動した。外部環境に応じて変幻自在の賢い材料「スマートバイオマテリアル」を第一線で研究する大矢教授を代表として、学内外の研究者が集結。(I)「体内で形を変える・吸収される」KUMPによる新規治療システムの構築、(II)「人にやさしい・患部に届く」診断・治療の非侵襲化・スマート化を実現するKUMPの作成、の2分野に注力して研究を行っている。今後もKUMPを設計・合成する材料化学者(Materials Chemists)と、そのデバイス化・システム化を実現する機械工学者(Mechanical Engineers)が連携し、現場の臨床医(Medical Doctors)からのニーズを受け、さらなる開発と臨床化研究を進め、3つのM(Materials, Mechanics, Medicine)で「人(患者と臨床医)に届く」医療器材の開発を推進する。

第21回関西大学先端科学技術シンポジウム 第3回日本医療総合展「メディカルジャパン2017」

● 未来医療への貢献を目指して



“KU-SMART プロジェクト”は、1月19日に本学で開催された第21回先端科学技術シンポジウムにおいて、私立大学研究ブランディング事業の特別セッションを実施。プロジェクトの

研究代表者であり医工薬連携研究センター長を務める大矢裕一教授や、大阪医科大学の根本慎太郎専門教授らが、事業内容や関大メディカルポリマー(KUMP)にかかわる研究紹介、製品化・事業化を目指す医工・産学連携におけるプロセスや障壁について解説した。また、プロジェクトに関する約10件のポスターも展示・紹介され、研究室の学生達がそれぞれの研究成果を来場者の方々に説明した。

同プロジェクトは、2月15日から3日間、インテックス大阪で開催された第3回日本医療総合展「メディカルジャパン2017」の「再生医療 産業化展」にも出展。メディカルジャパンは、医療IT、医療機器・設備、介護・看護製品、先端医療技術、製薬にかかわるあらゆる製品・技術・サービスが一室に出展する日本唯一の「医療の総合展」。KUMPが示す未来医療の可能性について、集まった来場者からは感嘆の声があがり、盛会のうちに終了した。

3月14日(火)には関大メディカルポリマーシンポジウムも梅田キャンパスにて開催予定。今後も医療の進歩のための革新的技術開発に寄与するべく、KUMPを活用した医療器材の開発と人材育成に努めていく。

■社会貢献・連携事業

○関西大学×NTT西日本による産学連携プロジェクト

学生の就職活動を「ICT面接トレーニング」でサポート



▲(左から) 盛山弘一氏(NTT西日本)、合田七穂さん(システム理工学部4年次生) 小尻智子准教授、芝井敬司学長

12月7日、関西大学と西日本電信電話株式会社は、情報通信技術を用いた「ICT面接トレーニング」の共同トライアルを開始することを発表した。

「ICT面接トレーニング」は、面接の場における自己プレゼンテーションの向上を目的とする、大学生の就職活動サポートプロジェクト。バイタルデータ収集システムに関するノウハウを用いた「ココロの見える化サービス」を展開するNTT西日本と、論理的思考やコミュニケーションスキルの支援研究において、バイタルデータ活用の可能性に着目していたシステム理工学部の小尻智子准教授の研究室とがタッグを組み、就職活動支援をテーマとする共同トライアルが実現した。



「ICT面接トレーニング」を体験した学生らによるプレゼン結果報告

本トレーニングでは、リストバンド型機器で心拍数を測り、顔認証カメラで表情や視線を撮影、音声テキスト化技術で問投詞(言葉のひげ)を抽出するなど、さまざまな要素を客観的情報としてデータ化する。学生は自身のバイタルデータやチャームポイントなどを知ることができ、新しい就職面接指導の可能性を提示するシステムとして期待が寄せられる。

○田實佳郎教授と帝人が共同開発

世界初のウェアラブルセンサー「圧電組紐」



▲1 製品の特徴を説明するシステム理工学部・田實佳郎教授(右) 2 靴やキーホルダーなど「圧電組紐」の応用例 3 「圧電組紐」を使ったチョーカーによる脈拍感知の実演

システム理工学部の田實佳郎教授と帝人株式会社は、ポリ乳酸繊維を使った圧電体を組紐状にしたウェアラブルセンサー「圧電組紐」を世界で初めて開発し、1月12日に関西大学東京センターで共同記者発表を行った。また、18日から東京ビッグサイトで開催された「第3回ウェアラブルEXPO」において展示、紹介した。

圧電体は、圧力を加えると電気エネルギーを発生し、電気エネルギーを加えると伸縮する特性のある物質の総称。田實教授と帝人は、2012年に「圧電フィルム」、15年に「圧電ファブリック」、16年に「圧電ロール」を開発し、環境配慮型素材・ポリ乳酸を圧電体として適用する可能性を広げてきた。

この度の「圧電組紐」は、日本の伝統工芸である組紐の技術を用いることで、1本の紐で「伸び縮み」「曲げ伸ばし」「ねじり」などの動きをセンシングできるウェアラブルセンサー。柔軟で屈曲性があるため、目的に合った長さや太さ、形状に調節でき、低ノイ



▲「第3回ウェアラブル EXPO」に出展した圧電素材のブース

ズ、高感度。小型コネクタで容易に機器との接続もできる。さらに、伝統的な「結び」の手法を用いることで、チョーカーなどの首飾りにして、脈拍や嚙下、咳などを識別する生体センサーとして活用することも可能となった。今後はファッション性や着用感などのニーズにも応じ、スポーツや介護・医療の分野など、幅広い用途での利用に期待が寄せられる。

ファッションを通じて「エシカル」の概念を発信

全国初！ 本格的な「Ethical fashion collection エシコレ」



商学部では、ビジネスプラン教育や問題解決型教育の一環として、ファッションを通じて「エシカル」を体感できる「エシカルファッションコレクション(エシコレ)」を、12月11日、梅田キャンパスKANDAI Me RISEホールにて開催した。

「エシカル(ethical)」とは、倫理的・道徳的という意味。オーガニックやフェアトレード、リサイクルを含む包括的な考え方であり、環境や動物、人に配慮したモノづくりを指す。

本イベントは、同学部生による学生実行委員会が企画・運営し、エシカルファッションを扱う「Lee」「パタゴニア」「ピープルツリー」など、13ブランドの協力を得て開催。当日のファッションショーでは、各ブランドのファッションアイテムを纏ったモデルや学生、ボランティアの親子ら40人以上がランウェイを闊歩し、各ブランドによる取り組みなども紹介。ファッションブランド界の実業家によるトークショーも開催され、300人を超える観客で埋まった会場は大いに盛り上がった。



11 Dec. 2016

Runway @ KANDAI Me RISE

「関西大学まちFUNまつり」を開催 大学と地域をつなぐキャンパスイベント

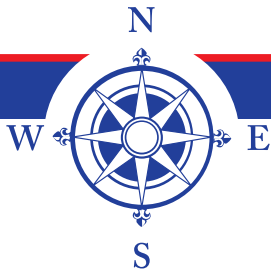


12月11日、千里山キャンパスにおいて、NPO法人関西大学カイザーズクラブ及びNPO法人ママふぁん関西の共催による「関西大学まちFUNまつり」が開催された。

本催しは、大学が保有する知財・人材・資材を開放し、地域の方々に大学という場の楽しさを体感してもらうことを目的とする大学・地域一体型イベント。当日は、サッカー、野球などのスポーツ体験をはじめ、科学の不思議を体感できるサイエンスショーやチアダンスパフォーマンス、メイクやネイル、手作り雑貨などの親子で楽しめる体験ワークショップなど、バラエティに富んだ「おもてなし」が行われた。

また、前回開催した「キャンパスママまつり」での企画に加え、新企画としてキッズバイクレースやダブルダッチ体験、お金の大切さと働く楽しさを学べる「子ども店長」ワークショップなども登場。来場者は総勢6,500人を超え、笑顔が溢れる一日となった。





フィギュアスケート・グランプリファイナル／全日本フィギュアスケート選手権大会

宮原知子さんが
全日本3連覇の快挙！

2016年12月9～11日、フランス・マルセイユで行われたグランプリファイナルで、体育会アイススケート部の宮原知子さん(文1)が銀メダルを獲得した。

続く22～25日、大阪府・東和薬品ラクトアドームで行われた第85回全日本フィギュアスケート選手権大会では、見事、金メダルを獲得。ショートプログラム1位に続くフリーでは、平和と愛をテーマとする『惑星～スターウォーズ』で貫録の滑りを見せ、2位に15点以上もの差をつけて快勝。3連覇の偉業を成し遂げた。また、本田真凜さん(中等部3年生)は4位、中村優さん(政策2)は6位に入賞し、好成績を残した。

この結果、宮原さんは3月29日(水)からフィンランドで開催される世界フィギュアスケート選手権大会への出場が確定。世界選手権は2018年の平昌冬季オリンピックの国別出場枠を懸けて行われるため、抜群の安定感を誇るフィギュア界のエースに大きな期待が寄せられている。

「子供と家族・若者応援団表彰」
人間健康学部・安田准教授ゼミが
「内閣府特命担当大臣表彰」を受賞

内閣府が実施する平成28年度子供と家族・若者応援団表彰において、堺市の推薦により、人間健康学部の安田典准教授ゼミが内閣府特命担当大臣表彰を受賞。2016年12月26日、東京都・内閣府講堂で開催された表彰式にて表彰された。

当表彰は、子供・若者を育成支援する活動、及び子育てとそれを担う家族を支援する活動に取り組み、顕著な功績をあげた企業、団体、個人を表彰するもの。

安田准教授ゼミは、大和川の水辺を利用して子供たちの自然体験・学習の機会を創出する「大和川水辺の楽校」の企画・運営に参画し、地域の子供達が楽しみながら環境について学ぶきっかけを提供。2012年からは堺市の小学生・本学学生・田辺市民が交流する「熊野本宮子どもエコツアー」も実施し、堺市の子供達に自然体験等を通じた環境教育の場を提供すると共に、同市の地域活性化にも貢献している。

「ぼうさい甲子園」で
社会安全学部・近藤准教授ゼミが優秀賞を受賞

優れた防災教育とその活動を行う学校や団体を表彰する「1・17防災未来賞『ぼうさい甲子園』」で、全国136校・団体の応募の中から社会安全学部の近藤誠司准教授ゼミが優秀賞を受賞した。1月8日に兵庫県で行われた表彰式・発表会では、ゼミ生4人が「みんなのぼうさい」と題して発表。ゼミで実施している災害情報や地域防災に関する調査、支援活動の成果を、さらに多くの人たちと共有したいとの思いを込めて発表した。



体育会サッカー部が全日本大学サッカー選手権大会でベスト8



2016年12月10日、東京都・江東区夢の島競技場で開催された第65回全日本大学サッカー選手権大会において、体育会サッカー部が2回戦で鹿屋体育大学に勝利し、準々決勝に進出した。続く12日には、千葉県・浦安市運動公園陸上競技場にて筑波大学と対戦。1対2で惜しくも敗退し、ベスト8で本大会を終えた。

▲写真提供：関大スポーツ編集部